F.ブルネレスキと A.ガウディがみたプリミティヴィズム: 亜周辺としてのビザンチン建築とイスラム建築

山村 健

1. 端緒

本稿は試論である。『カルチュラル・グリーン』第3号のテーマは「芸術と宗教におけるプリミティヴィズム」であり、建築の作家論を専門とする論者にとっては難題である。しかし、本テーマは建築家論の本質的な核心に触れるものであり、時代と場所を越えて聖堂建築を設計した二人の建築家に通底する共通項を抽出することが可能であれば、それが芸術と建築のプリミティヴィズム(Primitivism=根源的なもの、原典)として提示できると考える。

論者の専門とする研究対象は、19世紀から20世紀にかけてスペイン・バルセロナで活躍した建築家アントニ・ガウディ(Antoni Gaudí, 1852-1926)である。これまでガウディの建築論的研究として、ガウディの言説を対象とした彼の思想的系譜を考察してきた¹。本稿では、イタリア・フィレンツェで活躍したフィリッポ・ブルネレスキ(Filippo Brunelleschi, 1377-1446)を俎上にのせ、両者の共通項を抽出することを試みる。

ブルネレスキは、建築史に登場する最初の建築家である。建築史とは、一般的には西洋建築史を意味する。西洋建築史では通例、エジプト文明期の建築を起点として、その後はキリスト教の聖堂建築の歴史が紡がれる。それぞれの時代が様式として整理され、それらが進化してきたという発展の道筋が立てられる。建築家はその歴史的な一本の線の上に存在する一点であり、作家論は建築家の思想や作品をその線上における特異点として抽出することに意味を見いだしている。本稿は、線上に存在する異なる二点を抽出し、その二点を結ぶベクトルを探求するものである。具体的には重要な建築家として知られるブルネレスキとガウディが設計した建築を対象として、両者に共通する原典への視座を明らかにしながら聖堂建築におけるプリミティヴィズムについて考察する。

本稿は、次の順で論述される。

2 節でブルネレスキの原典を巡る議論について、3 節でガウディの原典をめぐる議論について、そして 4 節でブルネルスキとガウディの共通項について考察を進めていく。

2. サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の原典を巡る議論

2.1 フィリッポ・ブルネレスキの人となりについて

フィリッポ・ブルネレスキは、イタリア・フィレンツェで活躍した芸術家である。1377年にポー河流域の街フィカローロからフィレンツェ市にでてきた公証人の息子である。1398年、21歳で絹織物組合(アルテ・デッラ・セータ)に貴金属細工師として加入した。ピストイヤ大聖堂サン・ヤコポ礼拝堂の祭壇の銅製小像となどの装飾やギベルティ(Lorenzo Ghiberti,1381-1455)と競い合った《イサクの犠牲》などの装飾を製作し、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の総監督を務めることで、サン・ロレンツォ聖堂の旧聖具室、サント・スピリト教会、オスペダーレ・デッリ・インノチェンティなどを手掛けた。さらに理論面でも、アルベルティの『絵画論』(1443-1452)とあわせて透視図法の理論構築に貢献した芸術家として位置づけられている。ブルネレスキをはじめルネサンス期の芸術家に関する評伝を記したジョルジョ・ヴァザーリ(Giorgio Vasari, 1511-1574)からは「古代のギリシア人やローマ人の時代から今日まで、彼ほど比類のない傑出した人物は存在しなかったのではないか」3と評されている。

2.2 サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂と天蓋のコンペ

ブルネレスキが設計したサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のドゥオモ⁴は、彼の最高傑作として位置づけられている。さらに、建築史においては、ルネサンスの登場を告げる建築の代名詞として欠かすことのできない存在である。

サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂は、1294 年にアルノルフォ (Arnolfo di Cambio, 1245-1302 または 1310)の設計によって建設が始まった。様々な変更を被り、1357 年、フランチェスコ・タレンティ (Francesco Talenti, 1300?-1370?)の指揮のもとに再開された。この時点でアルノルフォの設計からは変更が生じていた。1367 年にドゥオモの大きさと形、すなわち高さ、幅及び曲率が決められた。1410 年から 1413 年にかけて八角形平面のドラム5が載せられた。これは、都市のスカイラインからドゥオモを突出させるためにかさ上げとして造られたものである。

驚くべきことにこのドラムから天空に向かって伸びるドゥオモとの結合方法が未解決のまま、工事は進んでいた。そこで、大聖堂造営局は、前代未聞の大屋根の架構方式を問うコンペティションを開催した6。この点に対して、ブルネレスキがドナテッロ (Donatello, 1386-1466)と古代ローマに赴き、古代ローマ建築からその解答のヒントを得たと指摘されることが多い7。

2.3 サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂とパンテオンの関係

本項では、まずサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の原典を古代ローマのパン テオンであるとする学説を渉猟する。

通常、ルネサンスは「古代の再生」の意味として理解される。それは、フランチェスコ・ペトラルカ (Francesco Petrarca, 1304-1374) が賞賛したキケロ (Marcus Tullius Cicero, 106 B.C.-43 B.C.) のラテン語の再生にはじまり、アルベルティ(Leon Battista Alberti, 1404-1472) が『建築論』の底本にしたウィトルウィウス (Vitruvius, 80-70 B.C.-15 B.C.) の『建築十書』など、ラテン語および古代ローマ時代の文献の発見がその基幹にある。その潮流において、建築でも古代ローマ建築に関する研究が開始された。ヴァザーリは、ブルネレスキがドナテッロとローマに赴き、ブルネレスキが建築を、ドナテッロが彫刻を対象として、古代遺跡の研究に没頭したと述べている。その中でブルネレスキはドナテッロにも明かすことなく、「ひとりローマに残ったが、円形や方形や八角形の神殿、バジリカ、水道橋、浴場、記念門、大劇場、闘技場、さらにレンガ造りのあらゆる神殿を彼は素描に留めた」と、ヴァザーリが述べたことから8、古代ローマ建築研究がドゥオモの原典となっているとする学説が多い。このヴァザーリの記述が建築学研究者や他分野に与えた影響は大きい9。しかしながら、ブルネレスキの素描が現存しないことから、詳細な内容を確認することができない。

2.4 サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の原典の別の存在

イタリア・ルネサンスを専門とする建築史家ピーター・マレー (Peter John Murray, 1920-1992)は「フィレンツェにおいて彼の名を不滅にした大聖堂のクーポラを架構可能にしたのは、疑いなく残存するローマ遺蹟の構造原理に関する綿密な研究であったからだ」(p.37)と、紋切り型の文で述べながらも、随所でビザンチン建築の影響を指摘している。ただし、マレーはブルネレスキが現在のように様式を理解していなかったという視点から、ビザンチン建築の様式を初期キリスト教の建物と認識していた

のではないか、と指摘している。また、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂に関しては、「クーポラはペンデンティブ一壁の隅部から前方に突出している湾曲した三角形一上に載っているために、正方形平面がクーポラの起拱点で円形に変形されている。ペンデンティブの使用はビザンチン建築ではじめて豊かに展開され、コンスタンティノープルのハギア・ソフィア聖堂にもっとも優れた一例をみることができる。だが、ブルネレスキはこのような例をまず見ることができなかったはずで、この構造システムをローマの遺蹟から導き出したにちがいない」「10と述べている。ブルネレスキがトスカナ・ロマネスク様式からの影響を受けていることは指摘されることであるが、そこにあるビザンチン様式の要素については、記憶しておいてよいだろう。

2.5 サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の原典として浮上するビザンチン建築

近代建築運動 CIAM の書記長を務めたジークフリード・ギーディオン(Sigfried Giedion, 1888-1968)は、高名な美術史家ハインリッヒ・ベルフリン (Heinrich Wölfflin, 1864-1945)に師事し、近代建築の萌芽をルネサンスに定め、近代建築が古典建築と連続した芸術運動であることを『空間・時間・建築』(1941)において浮かび上がらせ、ブルネレスキを次のように評している。「ブルネレスキが、その寺院や養育院において、すぐれた確かさで使用した弓形や半球形のヴォールトは一彼がいつも特に好んで用いたヴォールトのモティーフであったが一これはまた古代には滅多に用いられたことのないものであった。しかし、それはビザンチン建築ではごく普通のもので、特に宗教的な構築物の回廊や入口広間に、よく用いられた。ブルネレスキの時代には、フィレンツェとビザンチンの間には、比較的緊密な連絡があったのである。(下線は論者)また、最近の研究によると、ヴォールト架構問題についての初期ルネサンスの他の諸例における取扱い方は、古典的古代よりも中世、もしくはビザンチン時代に負っているということが明らかにされている」(pp.74-75)と。

また、我が国における建築論研究者の森田慶一(1895-1983)は、ルネサンスの建築の本質はドリス式をはじめとするオーダーの体系化、建築の上部から下部への構造的連続性をアーチの使用による構造原理の確立、そして、各肢体の比例の再発見とし、名称こそ出さないものの東方からの影響を強く主張している!!。

このギーディオンと森田の指摘は共通して、サンタ・マリア・デル・フォオーレの原 典として東方すなわちビザンチン建築の存在を認めているといえる。

2.6 15世紀フィレンツェに流入したビザンチン建築およびイスラム建築

では、15世紀フィレンツェがビザンチンを受容する土壌はいかに存在したのか。 歴史学者の樺山紘一によれば、14 世紀末から 15 世紀にかけて華開いたフィレンツ ェのルネサンスは、ビザンチンに依るとしている。1391年にオスマン帝国の脅威にお びえるビザンチン帝国から、皇帝一行がヨーロッパを訪れ、救援を要請しにきた。一 団のなかに、マヌエル・クリュソラス (Manuel Chrysoloras, 1335-1415) がいた。彼は、 都市で知識人に対してギリシア語を伝授した人物である。古典文献学の深い探求に 精を出していた当時のフィレンツェ人に大歓迎された。その後の 1439 年にはヨハン ネス・ベッサリオン (Johannes Bessarion, 1403-1472) がフィレンツェに到着し、コジモ・ デ・メディチ (Cosimo de' Medici, 1389-1464) のアカデミア・プラトン¹²の開設に影響を 与えた。1453 年、コンスタンティノープルがオスマン軍によって陥落すると、イタリア の商人たちはコンスタンティノープルに赴き、大量の写本文献を購入して、持ち帰っ たのである。さらにベッサリオンによって、当時のフィレンツェは多数の古代ギリシア 語の文献が蓄積された。1423 年ジョヴァンニ・アウリスパ (Giovanni Aurispa Pitsunerio, 1376-1459)と呼ばれるシチリア人の冒険家が、コンスタンティノープルから 240 点近 いギリシア語文献をフィレンツェに持ち帰ったという重要な史実がある。これはブルネ レスキがドゥオモに巨石を上空へ持ち上げるための牛力巻上機を制作していた時期 と重なる。つまり、ドゥオモを建設していた最中のフィレンツェには、コンスタンティノ ープルから人だけではなく、古典文献や諸学問が持ち込まれていた事実が確認さ れるのである。

ここで建築に関して紐解いてみる。ジュリアーノ・ダ・サンガッロ(Giuliano da Sangallo, 1445-1516)によるバルベリーニ手稿には、ハギア・ソフィア大聖堂の内観図がある(図 1)。これはロッツによれば、チリアコ・ダ・アンコーナ(Ciriaco d'Ancona, 1391-1452)の画帳の模写であるとされている¹³。彼はアンコーナ出身の商人であり、ブルネレスキと同時代人であった。ギリシアやエジプトを旅行し、古代遺跡を記録しつつ遺跡を採集していた。

ロス・キングは、「ブルネレスキはラテン語を知らず、ましてギリシア語にも通じていなかったから、それらの文献がイタリア語に訳されない限り、何にも役にたたかなかったことだろう」と述べているが14、重要なのはブルネレスキの語学力ではなく、彼の建

築家としてのアンテナであろう。ブルネレスキが触れることができた建築に関する情報は特定できないが、彼が何らかの影響を受けたことは考えられるのである。

確かに、古典文献学の視点からすると古代ローマ研究が重要なことは事実であったが、当時の社会の趨勢を考慮すると、知的好奇心に溢れていた知識人たちにとって、東方から流れ込んだギリシアや東方の世界もまた、刺激的な存在だったことが想像される。さらに、樺山はビザンチンだけではなく、イスラム世界の到達もルネサンスの立役者であるとしている。その根拠としてダンテ(Dante Alighieri, 1265-1321)の『神曲』の構想のなかに、イスラムのモチーフがあることや、羅針盤と火薬の発明や、窯業技術の伝来も東方宗教世界からもたらされたことを挙げている。

以上により、本項では15世紀フィレンツェにビザンチン文化やイスラム文化が流入 した土壌を確認した。また、ブルネレスキの原典について古代ローマに加えて、ビザンチン建築及びイスラム建築も視野にいれて考察すべきだとする道筋を明らかにした。4節ではその点に関して具体的に論究を進める。



図 1 Da Ciriaco d'Ancona. Santa Sofia a Costantinopoli. Biblioteca Apostolica Vaticana (右図は左図の黒枠点線部を拡大)

3. ガウディの原典をめぐる議論

3.1 アントニ・ガウディの人となりについて

アントニ・ガウディ・イ・クルネットは、スペイン、カタルーニャ州タラゴナ県レウスでうまれた。父方と母方の家系の双方に銅板器具職人がおり、職人に囲まれ育った。建築学校の予科のためにバルセロナに上京し、1878年に大学を卒業してすぐに設計活動を始める。代表作となるサグラダ・ファミリア聖堂の二代目建築家に 1883年に就任し、生涯その設計に没頭する。

ガウディは学生時代に建築に関する覚書きを記している。ガウディは晩年サグラダ・ファミリア聖堂内にアトリエを構えて活動していた。しかし、1936年の市民戦争で市内にある教会が標的となったことから、ほとんどの資料が焼失している。そのために、学生時代に書かれた『日記装飾論』と呼ばれる覚書きがガウディの思考を知る上で重要なテキストとなる。

そのなかには、理想的な聖堂を求める建築的ヴィジョンが記されている。プロポーションや性格といった古典的な建築的概念の記述や、「距離と視点」の関係から聖堂の全体像を考える重要性などが記されている¹⁵。本文中にヴィオレ=ル=デュク(Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc, 1814-1879)から影響を受けていることも示唆されているが、近年の研究ではそれ以外にも様々な美学者や哲学者からの影響が背景にあることが指摘されている¹⁶。

3.2 ガウディの造形の原典に関する二つの指摘

ガウディ建築の原典に関する研究は、思想的な研究、文学的側面からの考察など他にも存在するが、代表的なものは次の二つである。それらは鳥居徳敏と J・クッソによるガウディ建築の造形原理に関する研究である。前者はガウディ建築の原典がナイルデルタの鳩舎塔群造形にみられるという学説であり、後者はガウディ建築の造形の原典が自然の諸形象だとする学説である。

3.3 鳥居徳敏によるナイルデルタの鳩舎塔群造形の指摘

鳥居は、スペイン語書籍 El mundo enigmático de Gaudí (『ガウディの謎に満ちた世界』) (1983) において、ガウディの存命時に存在していた写真資料や図書資料を丁寧に精査し、ガウディ建築の原典が、ナイルデルタの鳩舎塔群造形および洞窟造形にあるとし、そこからの影響を二大造形的源泉として位置づけ、その連関性について論じている¹⁷。

具体的には、鳩舎塔群造形のドーム型の造形に用いられている放物線が、ガウディの晩年の作品であるコロニア・グエル教会において登場するドーム形態と類似していることを指摘している。ナイルデルタの鳩舎塔群造形の図版が、ガウディが通ったバルセロナ建築学校に存在していたことを典拠として、ガウディが影響をうけたとしている。中でも V・ドゥノン『下・上・エジプト旅行記』(1802)や、『エジプト研究』(1809)に掲載された図面がその根拠となっている(図 2、3)。

確かに形態に焦点を当てた考察としては、類似性を指摘できるだけではなく、ガウディ自身が、弟子に対して晩年に「ギリシア・ローマやラテンやビザンチン芸術のはじめての写真集が、図版に代わって図書館に到着したとき、私の情熱は燃えるばかりで、何時間も何時間も図書館に居残り、素晴らしい写真集を観察し、比較しながら我を忘れることがしばしばであった」¹⁸と言説を残していることとも一致しているために説得力のある指摘である。

3.4 J・クッソによる自然の諸形象の指摘

クッソ(Jordi Cussó, 1942-)は、1957 年から 1988 年にサグラダ・ファミリア聖堂建設委員会 の模型工房にて、ガウディのオリジナル模型の 修復、研究に従事した工芸家兼研究者である。 クッソは自らの模型制作の経験をもとに、ガウディが「作品に使用した有機的建築の根本」19を明らかにすることを目的として、ガウディの建築の原典が自然の造形にあることを突き止めようとしている。

具体的にはガウディが晩年に多用した二重 線織面は自然界の諸形象に発見されることを 明らかにしている(図 4)。もしくは、樹木の構造



図2『エジプト研究』(1809) ダミエッタ近郊の村

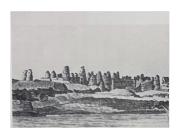


図3『エジプト研究』(1809) ロゼッタ近郊の村





図4 柱と自然の諸形象との関係

とサグラダ・ファミリア聖堂の身廊部の柱形状とを比較しながら、その関係の妥当性を示している。ガウディは晩年に「人間の作品はすでに印刷された本である」²⁰という言葉を残している通り、その自然観が原典であるという説も、鳥居のものと同様に有効であると考える。

3.5 ガウディが記した『日記装飾論』と言説にみられる聖堂建築の始源

ガウディが学生時代に記した『日記装飾論』は、1876年11月下旬から1879年に

記された。日付が断片的に記され、建築装飾に関する覚書きとして残されていることから、『日記装飾論』と呼ばれている。1936年の市民戦争において、サグラダ・ファミリア聖堂をはじめとする教会建築が焼き討ちにあったことで、同聖堂内にアトリエを構えていたガウディの多くの一次資料が焼失してしまったが、『日記装飾論』はガウディの弟子であったキンタナ (Francesc de Paula Quintana i Vidal, 1892-1966)の手によって保管されていたために現存し、現在は、レウス博物館に保管されている。

ガウディ研究者の入江正之(1946-)は、『日記装飾論』は「彼の志向すべき新しい 聖堂のヴィジョンを提示するもの」として位置づけている²¹。アメリカを代表するガウディ研究者であったジョージ・コリンズ(George R. Collins 1917-1993)は『日記装飾論』を エッセイとして位置づけ、建築を完遂するための適切な手段が箇条書きで記されていることを指摘している²²。スペイン人のガウディ研究者プッチ・ブアダ(Isidre Puig Boada, 1891-1987)は、「ガウディが建築学校の課程の最後に書いた覚え書きのなかで、キリスト教聖堂に与えた重要性は、注意されなければならない」²³として、その思考が晩年にまで影響していることを説いている。さらに、「詳細に注釈を加えることは興味深い」とされ、ラフエルタは『ガウディ』(2002)にて、ラウラ・メルカデルは『手稿と資料』(2002)にて、ムルシア建築家協会は『手稿、記事、会話、デッサン』(2002)にて、鳥居は『建築家ガウディ全語録』(2007)にて膨大な計を付すことを試みている。

しかし、これらの註はガウディが記した言葉、固有名詞、建築物などの史実的な検証がほとんどで、ガウディの言葉の背景を解題したものとなっているものの、ガウディの〈記述方法〉に関して註が付されたことはない。そこで、本稿ではガウディの『日記装飾論』にみられる〈記述方法〉に初めて着目して、考察を行う。

3.6『日記装飾論』における〈記述方法〉に関する考察

3.6.1 観察、比較、研究

本項では、ガウディが異なる建築様式を比較しながら、その差異をつぶさに「観察」していた点に注目する。『日記装飾論』は「装飾に関して真剣に研究してみようと思う」の一文で始まる。前出したガウディ自身の図書館での勉強方法の回想で「観察」を「研究」と置き換え、ギリシア・ローマやラテンやビザンチン芸術の写真集を「比較」して真剣に研究していた内容が『日記装飾論』であると換言することができるであろう。この視点に沿って、『日記装飾論』を検証する。

3.6.2 アルハンブラ宮殿とゴシック天蓋の比較 柱と空間の関係

ガウディは『日記装飾論』の冒頭に装飾に関して研究していくことを述べ、直後に 最初の主題としてアルハンブラ宮殿について記述を始めている。

アルハンブラ宮殿の写真を研究し、柱について述べると、(直)径が短いので、柱身の中央部にモールディングを付ける事で、柱頭の丈を延長しながら短くなっている。基壇における特別な色使いは、柱身の短い断片《短部》としてみせている。部屋や寝室を大きくするヴォールトを支える短い柱は、異なる部屋において、ゴシックの天蓋の縁飾りにも似たものを連想させる。線が重なりあう帯状装飾は、同様に反対方向に延びている。24

ここではイスラム建築とゴシック建築が比較されている。同世代のドメネク・イ・ムンタネー(Lluís Domènech i Montaner, 1850-1923)²⁵は建築の様式論を年代毎に記し、プッチ・イ・カダファルク(Josep Puig i Cadafalch, 1867-1956)はロマネスク建築の特徴に特化しているのに対し²⁶、ガウディの『日記装飾論』は、様式や時代を超越して比較を行うことで、建築の本質を探求するように論じられており、同時代の他建築家の記述方式とは峻別される〈記述方式〉であることがわかる。

3.6.3 ギリシア様式とゴシック様式の柱頭の比較

ここでは、ギリシア様式とゴシック様式の比較をみてみる。

神殿を含めたギリシア建築は長方形の平面をしていて、柱は円錐形で、メトープは 正方形、ペディメントは三角形で、装飾に関しては垂直線よりも水平線の雷紋パル メット模様など、無数の構成要素がある。大聖堂に関しては、ヴォールトの円形ア ーチはほぼ放物線を描き、透かし細工は円形の組み合わせで、角柱はピナクル や柱頭に用いられ、それは幾何学的形態の組み合わせである。²⁷

ガウディはゴシック様式とギリシア様式の比較を通じて幾何学のあり方を探求し、 幾何学的形態は鮮明で明快であるゆえに、それが完全であれば装飾は不要である、 という考えに至る。逆にギリシア様式、エジプト様式、ゴシック様式において植物を元 とした幾何学的な装飾は、平凡であることを指摘している。

非常に優れた歴史的なさまざまな主題による装飾は、自然の概念を不完全な形で表現する主題と比較される。(中略)つまり、ギリシア様式においてはパルメットの連続模様が帯飾りを構成し、エジプト様式の柱頭には花冠やさやと共にロータスの花が、あるいはゴシック様式の頂華には、連続する萎れた肌の朝黒いキャベツやセロリを模した葉の統一が表現される。28

ガウディは建築様式の比較を通して、幾何学とは装飾の表現手段を超えて、建築 それ自体に生命を与える重要な要素であることを理解している。

3.6.4 『日記装飾論』における〈記述方法〉の特徴に関する考察

『日記装飾論』の〈記述方法〉を表 1 にまとめた。左列にはガウディが記した建築的 主題を列記した。記述されている様式をまとめみると、異なる様式を比較しながら記述していることが窺える。さらに、ギリシア様式(青)とゴシック様式(オレンジ)が多いことが分かる。そして、ギリシア様式を賞賛する傾向にあり、ゴシック様式を批判的に考察している姿勢が確認できる。ガウディは晩年にもゴシック様式を批判的に捉えていることから、若年期からその視座を有していたことが分かる。

4. ブルネルスキとガウディの共通点

以上の考察を踏まえて両者の共通点について考察していく。

4.1 ゴシック建築の超越

一つ目は、ゴシック建築との関係から考察したい。ブルネレスキの時代は北方でゴシック建築が主流であったことをヴァザーリの記述から知ることができる²⁹。浅野捷郎によれば、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂は「ゴシックのリブ・ヴォールト天井の裏返し」であるとして、ドゥオモの構造の原典がローマではなくゴシックにあることを指摘している³⁰。ブルネレスキが達成した二重殻構造の背後には、ゴシック建築を超越しようとした試みが潜んでいることを意味している。一方で、ガウディも3節で述べたように、『日記装飾論』においてゴシック建築に対する批判的考察している。そして、コロニア・グエル教会では、構造的問題を解決するにあたり、控え壁が聖堂内に照射

表 1 ガウディが『日記装飾論』で記した様式を超えた比較の〈記述方法〉

テーマ	比較対象1	比較対象2	比較対象3	頁数	概要
円柱と天蓋	アルハンブラ	ゴシック		7	アルハンブラの広間においては、ヴォールトを支えるための小さな円柱によって、部屋あるいは構成部材を大きく見せている。 それがゴシックの天蓋に似たものである。
幾何学	ギリシア神殿	カテドラル		7	ギリシア神殿は平面面、円錐形の柱、正方 形、三角形、水平垂直(雷紋、パルメット トに対して、カテドラルは放射線の円弧、 透かし模様(円の組み合わせ)、角錐(ピ ナクル)
柱頭	リシクラテス	アポローン神殿		9	ドリス式は簡素で力学的、リシクラテスは 誇張した幾何学、エレクティオンは幾何学 的であり運動観がある。
柱頭	パルテノン	エレクティオン		10,11	エレクティオンの柱は明暗法、シルエット パルテノンはそれ自体で装飾的
建築の完全性	サクレクール	パリのノートル ダム		16	サクレクールは駄作
説教	ゴシック	現代		17,18	かつては祈祷がメインで、今は違う。かつては祈り、行事があったが、現在は道徳的な教えや強化された司教座。ただ、今も昔もカーテンで教会を暗闇とする。この暗さが想像力を高める。
風景画的概念	ギリシア	エジプト	ゴシック	26	ギリシアは帯飾り、エジプトは花冠ロータ ス、ゴシックキャベツ、セロリ
柱頭	コリント式	ゴシック		26	コリントはアカンサスで、ゴシックは野菜
トリビューン	ルネサンス	ゴシック	初期バシリカ	31	ルネサンスは欠点が多く、ゴシックは統一 性がとれていた。バシリカはよかった。タ ラゴナにはない。
円柱のプロ ポーション	ギリシア	パリのノートル ダム	サンタ・マリア ・デルマール	42,43	パルテノンやエレクティオンが良く、ノー トルダムは凡庸で、デル・マールは適切
レリーフ	エジプト	ギリシア		50	エジプトのレリーフの方がギリシアものより豊かである。しかし、ギリシアにはプロポーションがある。
明暗法	ギリシア	ローマ		58	ギリシアの明暗法がローマで失われてし まっている。

ギリシア様式もしくは建築 ゴシック様式もしくは建築

する光を遮蔽する不適切なものであり、その構造的非合理性を看破してデザインしていた。様式という概念を通じてではなく、ゴシック建築を超越すべき指標として両者が設計した建築の特異性を抽出できる点で共通しているといえる。

4.2 ビザンチン建築の応用

二つ目は、ドーム架構に関して比較する。ブルネレスキはサン・ロレンツォ聖堂の旧聖具室(1421-1428)において、ペンデンティブ・ドームを用いている³¹。同構法は、コンスタンティノープルのハギア・ソフィアで用いられており、上記(2.6)でみたように、東方の建築に関する知見がフィレンツェに流入していた事実がある。チリアコ・ダ・ア

ンコーナが初めてコンスタンティノープルを訪れたのが 1417 年から 21 年とされており、ブルネレスキがこれを参 照した確証はなく推測の域をでない。しかし、ペンデンティブ・ドームを使用した聖堂としての意匠的系譜においては、同ビザンチン建築とサン・ロレンツォ聖堂の旧聖具室が並ぶことに疑いはない。一方で、ガウディは、コロニア・グエル聖堂において大小異なる連続的なドームを試みている(図 5)。プッチ・ブアダは、コロニア・グエル教会において、ビザンチンのドーム架構を超えようとしたことを指摘している³²。ゆえに、両者ともビザンチン建築を応用してデザインを創出しようとした点で共通しているといえる。

また、ガウディはビザンチンの彩色技法も応用している。古代ギリシアの神殿が遠方からの視認性を考慮して厳格な幾何学が用いられていることを踏まえて、サグラダ・ファミリア聖堂の鐘楼は幾何学が積層された構成となっており、その表面はガラス・モザイクによって彩られている(図 6)。完成時に、ガウディが「あのモザイクのすべてがギリシアなのだ。コンスタンティノープル(イスタンブール)だ」33と述べた。ここにガウディのビザンチン建築の研究成果をみることができるのである。

4.3 イスラム建築の二重殻構造の展開

三つ目は、イスラム建築の特徴である二重殻構造の応用である。サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂(図7)は、二重殻構造を用いて既存のドラムの上にドゥオモを載せることに成功した。イスラム建築には、二重殻構造をもつ建築がそれ以前に存在している。福田晴虔(1938-)によれば、サンパオレジ(Piero Sanpaolesi, 1904-1980)によって古代ペルシア建築に先例があったことが示されて



図5 コロニア・グエル のドーム架構



図 6 サグラダ・ファミリア 聖堂の鐘楼



図 7 フィレンツェの 二重 設構 浩

いる³⁴。イスラム文化が当時のフィレンツェに流入してきた時代背景は上記(2.6)で確認した通りである。一方で、ガウディが通ったバルセロナ建築大学のドメネク・イ・ムンタネー教授が著した『美術全史一建築の巻一』(1886)にはスルタン廟の霊廟の図版が掲載されている(図8)。同教授の講義を受講していたガウディがこの図版を見た可能性は高く³⁵、ガウディはグエル邸(1886-1888)のホールにて二重殻構造を採用し放物線ヴォールトを架けている(図9)。

二重殻構造の利点は粗い構造を隠蔽し、ドームの内側を端正にみせることである。これを活かして、ヴァザーリ他はサンタ・マリア・デル・フィオーレ聖堂で透視図法を利用した「最後の審判」を描き、ガウディはグエル邸にて天空の星空を表現した。

両者が二重殻構造を用いている共通点の原典 にはイスラム建築の存在を指摘することができ る。

4.4 レンガを用いた構法の応用

四つ目は、レンガと寸法の使用法である。ブルネレスキは型枠を用いずにレンガを積む方法を提案した。当時問題となっていたのは、巨大な天蓋をかけるために用意する型枠それ自体の構築方法であったが、ブルネレスキは型枠を組まずに積層させる方法を発見する。それは速乾性のセメントを用いながら、縦・横を90度ずつ反転させて積んでいく方法で「矢筈積み(spinapescie)」と呼ばれる(図 10)。ガウディも同様に薄肉レンガを用

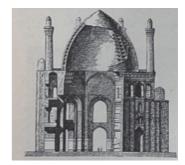


図8 スルタン朝二重殻構造の霊廟(八角形平面)



図9 グエル邸の二重殻 構造(中央ホール)

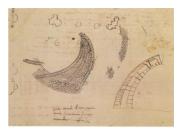


図10 矢筈積み

いたカタルーニャの伝統的構法によって、型枠を不要とする構法を用いて空間を設計していた。これはカタルーニャ・ヴォールトと呼ばれる構法で、ボベディージャやボベダ・タビカーダ、隅切りされた円球状ヴォールトなどの呼称で現在も使われている構法である(図 11)。



図11 カタルーニャ・ヴォールト

4.5 設計組織体制

五つ目は、設計組織体勢である。ガウディは、大学卒業後に自らの設計活動をプンティ工房というバルセロナ市内にあった工房に間借りして行っていた。プンティ工房はエウダルド・プンティ(Eudald Puntí, 1817-1888)が開設した工房であり、ガラス職人、木工職人、左官職人、レンガ職人らをかかえていた。

ブルネレスキも駆け出しの頃は工房で修行している。フィレンツェの工房は、美を 追究することであればなんでも引き受けるというシステムであり、彫刻、絵画、建築、 工芸品などあらゆる職種を駆使して、制作が行われていた。

両者の建築が生まれた背景には、この多種多様な職種が混在する場が存在していた共通点も確認できる。

5. 結論

各節の考察をまとめて結論としたい。

- 1節では、本稿の端緒として論述の背景、目的、方法について述べた。
- 2節では、まず、ブルネレスキの人となりを整理した。次にブルネレスキとサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂に関する既往研究を渉猟し、古代ローマ建築を原典とする諸説を俯瞰しながらビザンチン建築やイスラム建築の存在を俎上にあげた。その背景としてビザンチン建築とイスラム建築の知見が当時のフィレンツェに流入してきた土壌を明らかにした。
- 3 節では、はじめにガウディの人となりを概説した。次に、ガウディの既往研究として建築の原典として指摘されている鳩舎塔群造形や自然の諸形象からの引用に関する学説を確認した上で、ガウディの言説や直筆の『日記装飾論』の記述方法に着目し、ビザンチン様式やイスラム建築の重要性を抽出した。

4 節では、ブルネレスキとガウディの両者を比較した。まず、両者ともゴシック建築を超越する架構に挑戦していた点で共通しており、次にビザンチン建築のドーム架構の応用とイスラム建築の二重設構造を展開した建築的特徴において共通項を導き出した。さらに、レンガを用いる建設方法や、生産組織体制の点でも共通項を指摘した。本論の考察を経て重要な点は、両者ともそれ以前の建築を様式的に理解していたのではなく、個別の建築がもつ特徴を超越し、応用し、展開していく視座を有していた点で共鳴しており、特にその原典がフィレンツェやバルセロナにある建築ではなく、その外にある建築を俎上にのせることによって両者の建築の特異性を説明することが可能である点にあるといえる。福田によるブルネレスキに様式的な側面を抽出することが不可能であるとする学説や、入江のガウディが様式を超越した建築的ヴィジョンを見据えていたとする学説とを合わせたところに、本稿の試論としての位置づけがあるといえる。6

ブルネレスキは 15 世紀フィレンツェで、ガウディは 20 世紀バルセロナにて、前者は〈Renacimiento=ルネサンス〉を、後者は〈Renaixença=ラナシェンサ=20 世紀のカタルーニャの文芸復興運動〉を闊歩した建築家であり、両者とも新たな時代の建築を求めた。本論では、時代と場所の異なる聖堂を設計した二人の建築家に通底する共通項の抽出を試みた。彼らの建築においては、ビザンチン建築やイスラム建築との接触が推測できるが、そうしたヨーロッパ亜周辺の建築に、根源的なものを見出し昇華していったと見ることもできるだろう。こうした新たな建築を創造しようとした彼らの視座は、芸術と宗教におけるプリミティヴィズムの一端として提示できると考えられる。

1 拙稿「建築家アントニ・ガウディと美学者パウ・ミラの諸概念の関係について 建築家アントニ・ガウディの建築論的言説に関する研究(3)」(2019)などを参照。

² カルポ 『アルファベット そして アルゴリズム』(2014)によると、ブルネレスキは「原作者による芸術としての建築の近代史」の原点に位置づけられる。

³ ヴァザーリ『ルネサンス彫刻家建築家列伝』(2009)、p.145 参照

⁴ 半円形の丸天井のことをドームと呼ぶが、イタリアの建築に対してはドゥオモ(Duomo)とイタリア語で呼ばれることが多いため、本論ではサンタ・マリア・デル・フィオーレのそれをドゥオモと記している。

⁵ ドラムとは、ドーム(ドゥオモ)をかさ上げするシリンダー状の構造部分をいう。

⁶ サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のコンペに関する記述は多数あるが、本稿ではファネ

- ッリ『ブルネレスキ(イタリア・ルネサンスの巨匠たち)」(1994)を下敷きにした。
- 7 ヴァザーリ、*op.cit.3*、参照。ブルネレスキ本人に関する史料が少ないため、現代では、ヴァザーリやマネッティ(Antonio di Tuccio Manetti, 1423- 1497)の伝記に依拠している。ブルネレスキの野帳などは、今後の調査研究が期待される。
- ⁸ ヴァザーリ、*op.cit.3*, p.111
- 9 飛ヶ谷 『盛期ルネサンスの古代建築の解釈』(2007)、p.27 参照。「古代建築や中世建築の研究者にとって、建築技術の研究は工匠研究と同様に、様式研究よりもむしろ主流として古くから行われてきた。だが、ルネサンス建築の場合は、技術面における革新性が特にみられるわけではないので、フィレンツェ大聖堂クーポラのような特殊な例をのぞいて、建築技術に関する研究はかなり新しい分野に属する」とある。リーチは『建築史とは何か?』(2016)の中で、「アルベルティの時代なって、ローマ遺跡への関心が再燃すると、古代都市に残る建造物を実測し現代建築のモデルとしてしっかり把握するような伝統が生まれる。フィリッポ・ブルネレスキがサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂にて実現したドーム屋根(1418-36 年)は、ローマ・パンテオンのドーム屋根を参考にした偉業である」(p.39)と記している。なお、塩野『ルネサンスとは何であったか』(2001)では、パンテオンとサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の構造的な違いを抽出している。
- 10 マレー 『イタリア・ルネッサンスの建築』(1991) p.49 参照。「ローマの『ミネルヴァ・メディカ』の神殿のヴォールト天井は、ブルネレスキの時代にはまだ架かっていて、彼にそうした考えを与えることができた。厳密にいえば、それはペンデンティブ上には載っていなかったのだが」という言及もある。また、「初期ルネッサンス様式がどれほどトスカナ・ロマネスク様式に根ざし、同時に古典古代に由来する数々の要素を提出しているか理解するであろう。(中略)円柱、柱頭、持送りはすべて古典的様式である。一方円柱は柱頭とヴォールト基部の間に挿入された柱頭板を持つ。柱頭板はローマというよりはビザンチンのものだが、フィレンツェのサンティ・アポストーリ聖堂のようなトスカナ・ロマネスク聖堂にも見られるものだ。彼の生涯のこの段階では、10 世紀のサンティ・アポストーリ聖堂が初期キリスト教(4、5 世紀)の建物だと考えることは全くありそうなことだ」とも述べている(pp.45-46)。
- 11 森田『西洋建築史概説』(1962)、p.109 および pp.112-113 参照。
- 12 アカデミア・プラトン (Accademica Platonica)は、コジモ・デ・メディチが開設した人文主義者を対象としたサークルとして機能していた。
- 13 ロッツ 『イタリア・ルネサンス建築研究』(2008)、p.170。ロッツによれば、サンガッロは数十年にわたって素描を積極的に集めていたという。そして、このハギア・ソフィアの素描がそのコレクションの最初であると位置づけている。
- 14 キング 『天才建築家ブルネレスキ』(2002)、p.98
- 15『日記装飾論』の聖堂のヴィジョンに関する考察は、入江『アントニオ・ガウディ論』(1997)、 第二編第二章第二節に詳しい。
- 16 拙稿「建築家アントニ・ガウディと美学者マヌエル・ミラの諸思想の関係について 建築家アントニ・ガウディの建築論的言説に関する研究(2)」(2012)など。
- 17 鳥居『建築家ガウディ―その歴史的世界と作品』(2000) や、同『ガウディ建築のルーツ―造形の源泉からガウディによる多変換後の最終造形まで』(2001) などにも詳しい。後者では、「どのようにしてガウディ建築という特殊な建築が形成されたのか、それを解き明かすことを主

要目的とする」(p.3)としている。

- ¹⁸ Bergós, Gaudí el hombre y la obra, 1974, p.24
- 19 クッソ 『ガウディ 自然と聖家族教会』(2011)、p.5
- ²⁰ Bassegoda, Las Conversaciones de Gaudí con Juan Bergós, 217 番の言説参照。
- 21 入江 『アントニオ・ガウディ論』(1997)、p.171
- ²² *Ibid.*, p.179
- ²³ *Ibid.*, p.176
- ²⁴ Gaudí, Manuscrit de Reus, p.5
- ²⁵ Domènech i Montaner, Historia General del Arte, Tomo I, 1886
- ²⁶ Puig i Cadafalch, L'arquitectura romana a Catalunya, 1935
- ²⁷ Gaudí, op.cit.24., p.7
- 28 Gaudí, op.cit.24., p.26
- 29 ヴァザーリ、op.cit.3, pp.111-112 および p.145 では、ブルネレスキが活躍した当時、「数多くの建物に見られるように、彼の生きた時代には、ドイツ様式(ゴシック様式)がイタリア中で尊重され、古い世代の工匠たちによって適用されていた」と述べられている。ブルネレスキのゴシック建築への理解に関する研究は今後の課題としたい。
- 30 浅野「フィレンツェ大聖堂ドームとパラッツォ・マッシモの建築形態と源泉と創意について」 (1991)、p.176 参照。
- ³¹ ペンデンティブ・ドームは、正方形の平面の上にドームを載せる際に、外接する四隅にみられる球面三角形の部分のこと。
- 32 Boada, L'església de la Colónia Güell, 1976
- 33 Cesar, GAUDÍ I LA SAGRADA FAMILIA. Comentada per ell mateix., p.141
- 34 福田『ブルネッレスキ―イタリア・ルネサンス建築史ノート〈1〉』(2011)、p.51
- 35 この他にガウディはアリアス・ルジェン(Elies Rogent i Amat ,1821-1897)の建築論の講義も受講していた。ルジェンの講義録が Memories, Viatges I Lliçons, COAC,1990 にまとめて残っている。そこでもビザンチン建築、イスラム建築の講義が確認できる。
- 36 それぞれ福田『ブルネッレスキ―イタリア・ルネサンス建築史ノート〈1〉』(2011)および入江『アントニオ・ガウディ論〔新装版〕』(1997)参照。

<参考文献>

Bassegoda Nonell, Joan. Las Conversaciones de Gaudí con Juan Bergós, "Hogar y Arquitectura", 1974

Bergós, Joan. Gaudí, hombre y la obra, Universidad de Polytécnica de Barcelona, 1974

Boada, Isidra Puig. L'església de la Colónia Güell, Lumen, 1976

Domènech i Montaner, Lluís. Historia General del Arte, Tomo I, Montaner i Simón, 1886

Gaudí i Cornet, Antoni. Manuscrit de Reus, Museo de Reus, 1873-1879

Martinell, Cesar. GAUDÍ I LA SAGRADA FAMILIA. Comentada per ell mateix., Ayma, 1951

Puig i Cadafalch, Josep. L'arquitectura romana a Catalunya, Institut d'Estudis Catalans, 1935

Torii, Tokutoshi. El mundo enigmático de Gaudí, Instituto de España Madrid, 1983

浅野捷郎「フィレンツェ大聖堂ドームとパラッツォ・マッシモの建築形態と源泉と創意について」、日本建築学会計画系論文報告集、429 巻 pp.175-182、1991

G·C·アルガン『ブルネッレスキ』、浅井朋子訳、鹿島出版会、1981

入江正之『ガウディの言葉』、彰国社、1991

入江正之『アントニオ・ガウディ論〔新装版〕』、早稲田大学出版部、1997

ジョルジョ・ヴァザーリ『ルネサンス彫刻家建築家列伝』、森田義之監訳、白水社、2009

樺山紘一『世界歴史 16 ルネサンスと地中海』、中央公論社、1996

マリオ・カルポ『アルファベット そして アルゴリズム―表記法による建築』、美濃部幸郎訳、鹿島出版会、2014

ジークフリード・ギーディオン 『空間時間建築』、太田實訳、丸善株式会社、1969 ウリヤ・フォークト・ギョクニル 『世界の建築 トルコ』、森洋子訳、美術出版社、1967 ロス・キング 『天才建築家ブルネレスキ』、田辺希久子訳、東京書籍、2002 ジョルディ・クッソ 『ガウディ 自然と聖家族教会』、Milenio Publicaciones、2011 塩野七牛 『ルネサンスとは何であったのか』、新潮社、2001

鳥居徳敏『建築家ガウディ―その歴史的世界と作品』、中央公論美術出版、2000

飛ヶ谷潤一郎『盛期ルネサンスの古代建築の解釈』、中央公論美術出版、2007 ジョヴァンニ・ファネッリ『ブルネレスキ(イタリア・ルネサンスの巨匠たち)』、児嶋由枝訳、東京 書籍、1994

福田晴虔『ブルネッレスキ―イタリア・ルネサンス建築史ノート〈1〉』、中央公論美術出版、2011 ヤーコプ・ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』、新井靖一訳、筑摩書房、2007 ジョン・D・ホーグ『イスラム建築(図説世界建築史)』、山田幸正訳、本の友社、2001 アントニオ・マネッティ『ブルネッレスキ伝』、浅井朋子訳、中央公論美術出版、1989 ピーター・マレー『イタリア・ルネッサンスの建築』、長尾重武訳、鹿島出版会、1991 森田慶一『西洋建築史概説』、彰国社、1962

山村健、入江正之「建築家アントニ・ガウディと美学者マヌエル・ミラの諸思想の関係について

建築家アントニ・ガウディの建築論的言説に関する研究(2)」日本建築学会計画系論文集、77 巻 672 号、2012、pp.453-461

山村健、入江正之「建築家アントニ・ガウディと美学者パウ・ミラの諸概念の関係について 建築家アントニ・ガウディの建築論的言説に関する研究(3)」、日本建築学会計画系論文集、84巻765号、2019、pp. 2427-2436

アンドリュー・リーチ 『建築史とは何か?』、横手義洋訳、中央公論美術出版、2016 ヴォルフガング・ロッツ 『イタリア・ルネサンス建築研究』、飛ヶ谷潤一郎訳、中央公論美術出版、 2008